

# 畑中敦子の 資料解釈の最前線!

- 計算ゼロを目指した画期的な解説!
- 最新の本試験問題を中心に過去問のみ60問!
- レベルアップ方式で確実に力をつけよう!

資料解釈が  
資料解釈が  
資料解釈が  
資料解釈が

2週間で  
資料解釈を  
得意にする!

小木郎

畑中敦子

計算なんて  
必要ないワニ

# はしがき

公務員試験全般において数的処理の攻略は非常に重要です。一般に公務員試験では、専門試験で点差がつきにくく、教養試験が合否を左右するといわれています。この教養試験の中でも数的処理は、苦手とする受験生が多く出題数も多いことから、この科目での得点が合否の決め手となりうるのです。逆に、数的処理を得点源とできれば、合格に一歩近づくことができます。

## <本書のねらい>

数的処理必勝法としては、“いかに短時間で多くの問題を解くか”ということにつきます。解答するスピードを身につけるには、速解テクニックが欠かせません。本書はその速解テクニックを効果的に伝えるために企画制作されました。

## <本書の特長>

### 1 速解テクニック満載

本書は著者の完全書き下ろしです。効率良く計算するテクニック等も、存分に収録しています。

### 2 易しい問題から難しい問題へ進む効果的な構成

本書は、資料の複雑度や選択肢の難易度を考慮したレベル別の出題となっています。取り掛かりやすい問題からスタートできるので、解答テクニックを効果的に学習することができます。

### 3 豊富な付録で計算力をアップ

巻末付録にテクニック集や暗算問題集など資料解釈問題に不可欠な計算力をアップすることができます。必要最小限の計算をスピーディに行うことができます。

本書をご利用いただき、最終合格を勝ち取られることを心より祈念しています。

2004年3月吉日

株式会社 東京リーガルマインド  
LEC総合研究所 公務員試験部

## はじめに

判断推理や数的推理と比べると、データを処理するという意味で資料解釈は、極めて実践的な内容に思えます。けれど、皆さんが実際に働く現場でデータに向かうとき、おそらく皆さんの前にはパソコンか、少なくとも電卓のひとつ位はあるでしょうね。

しかし、ご存知のように、試験では電卓すら使わせてもらえません。山ほどの数値の書かれたデータを前に、皆さんに問われているものは何なのか、考えたことがありますか？

もともと、数的処理の出題の目的は「迅速な判断力と事務処理能力」をみることにあります。資料解釈でもそれは同じで、「計算力」ではなく「判断力」なんですね。

ですから、資料解釈といえば「計算」。より速く正確に計算をすることがポイントである。といわれれば、全く否定することはできませんが、もっと大切なのは、計算を最小限の暗算レベルに抑え、より効率良く選択肢の内容を判断していく「要領の良さ」にあると言っているでしょう。ときには、面倒な計算をさけて通るのも、大切なテクニックの1つとなってきます。

ところが、現在出版されているほとんどの問題集の解説は、電卓で計算をした結果が載っているだけで、実際役に立たないものが多いようです。そこで、なるべく面倒な計算に手を出さない方向で選択肢を判断する一つの材料となればと思い、筆者は本書の執筆にあたりました。

とはいっても、「判断の方向性」や「要領の良さ」というのは、人によって異なるものです。皆さんの感性に受け入れられるかという不安を抱えながら書いたのも事実ですが、こういう考え方もあるんだという参考材料にして頂くことで、皆さんなり要領の良さを発揮して頂く糧になれば幸いに思います。

データが氾濫している世の中です。必要なもの、大切なものを迅速に見極め、適切な判断を下すことのできる、「頼もしい公務員」になってくださいね。

2004年2月吉日

畑中敦子

# CONTENTS

CONTENTS

# CONTENTS



はしがき  
はじめに  
本書の効果的活用法

**Level 1** まずは入門レベル！ ..... 1

**Level 2** 標準レベルPart 1！ ..... 35

**Level 3** 標準レベルPart 2！ ..... 79

**Level 4** ここは挑戦レベル！ ..... 129

## 付録

基本用語集 ..... 186  
テクニック集 ..... 188  
暗算問題集 ..... 204

# 本書の効果的活用法

## レベル

5つの選択肢の難易度を平均し、資料の複雑度などを考慮して、センサーの判断で4段階に分類しました。あくまで目安ってことで!



## 目標時間

本試験のときに、このくらいの時間で解ければOK!かな?という目標時間です。5つの選択肢すべてをこの時間で検討せよ!ということではないからね。もちろん、ラッキー!なときはもっと早い時間で終わるでしょう!

## 出題試験種

最新の本試験問題からセレクトした良問ぞろい!  
本編は全て過去問だよ!



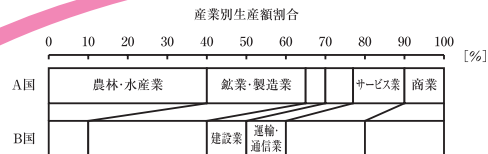
Level 1  
LEVEL

1

Basic 6

目標時間 3分

次の図はA国とB国の産業別生産額割合を示したものであり、農林・水産業の生産額はA・B両国で同じである。この図から判断して、確実にいえるのは次のうちどれか。(千葉県警 2002)



- 1 商業の生産額は、B国はA国のおよそ12倍である。
- 2 A国の鉱業・製造業の生産額はB国の建設業の生産額の2分の1である。
- 3 B国の総生産額がその割合を変えずに50%減少したとしても、B国の建設業の生産額のほうが、A国のサービス業の生産額よりも多い。
- 4 A国の総生産額がその割合を変えずに100%増加したとすると、A・B両国の商業の生産額はほぼ等しくなる。
- 5 A・B両国の総生産額を合計し、産業別割合を見ると、建設業の生産額の割合は20%となる。

A・B両国の農林・水産業の生産額が同じということとは、A国の総額の40%と、B国の総額の10%が等しいということですね。

では、仮にA国の総額を100とすると、農林・水産業の生産額は40ですから、B国の10% = 40となり、B国の総額は400と表せます。

では、この数値で各肢を検討してみましょう。

肢1ですが、商業の生産額は、A国は構成比をそのまま読めばいいので10、B国のほうは、構成比を4倍して読めばいいですね。20 × 4 = 80ですから8倍です。

## 解説本文

センサーが愛情こめて、読者のみんなに語りかけています。センサーの講義を聴くつもりで読んでね。■部分は黒板ってカンジかな。

## 側注

ここはボクの出番！  
センサーのアシスタントとしての腕の見せどころサ！詳しくは次のページを見てね！



Basic 6

肢2は、A国の鉱業・製造業は25、B国の建設業は $10 \times 4 = 40$ ですから2分の1にはなりません。

肢3は、B国の総額を400→200にすればいいので、構成比を2倍して読みましょう。B国の建設業は $10 \times 2 = 20$ 、A国のサービス業は15に満たないですから、本肢は正しいですね。

肢4ですが、今度はA国の総額を100→200にして考えましょう。しかし、それでも総額はB国のほうが大きいですね。さらに商業の構成比も $A < B$ ですから、明らかにB国のほうが大きくなり、ほぼ等しくなる可能性はないでしょう。

肢5は、建設業の構成比を見てください。A国5%、B国10%です。ここでこの両国の合計で、建設業の構成比が20%にもなるはずはないでしょう。

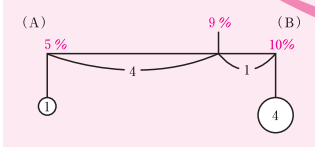
ちなみに、でんびん図(テクニック⑧)を使って、両国を合計したところの、建設業の割合は9%とわかりますね。

### ちょっと補足

Bを半分にしても同じなので、肢3同様にBの構成比を2倍にするだけでも比較は可能だね。



巻末付録2テクニック集参照！



側注表記の意味は次ページ

## テクニック

巻末付録2のテクニック集にまとめてあるよ！

巻末付録2のテクニック集を一通り確認して、付録3暗算問題集で力をつけてね！



# 側注表記の意味

## One Point

ワンポイント

何がわかる資料なのかを把握していれば本問は超カンタン！ 判断不可能な選択肢にはくれぐれもご注意！

アドバイス

## Advice



けっこう大事なことを言ってます!!  
ココは欠かさず読んでね！

その名のとおり、ちょっとした補足です！  
でも、いろいろ参考になることも多いと思うよ。軽い気持ちで読んでね！

## ちょっと補足

Bを半分にしても同じなので、  
肢3同様にBの構成比を2倍にするだけでも比較は可能だね。



ナットクいかない方はこちら。

?! 

「2」だったら東京の $\frac{1}{2}$ 、

「3」だったら東京の $\frac{1}{3}$ の

価格ってことだからね。

?! って思ったらココを読んでね！  
もちろん、ナットクってる人には必要なし！

## 小太郎の電卓部屋



ここはあくまで「確認」のコーナー！  
計算なしで解く要領がまず大事！

C県： $1444 \div 22.5 \approx 64.2$

D県： $1006 \div 15.8 \approx 63.7$



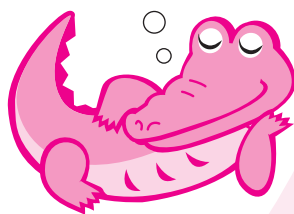
ちょっと注目してほしいな！ってところでボクのこのマークが登場！  
しっかりポイント押さえてよ！

# Level 1

## まずは入門レベル！

- ★表やグラフの見方に慣れ、暗算のテクニックを磨きましょう。
- ★与えられた資料からは判断できないことを問われることもあります。引っかけからないように気をつけてくださいね。

上級者は  
飛ばしてOK！



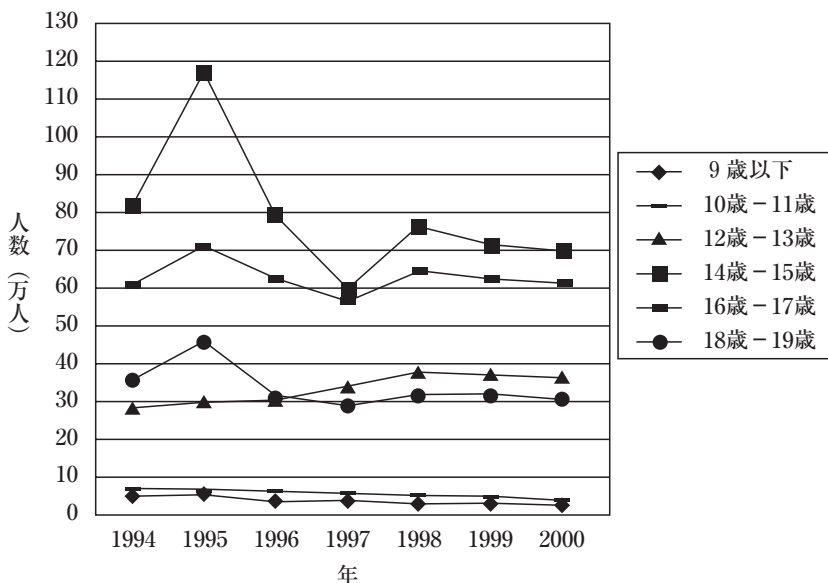
BASIC



目標時間 3分

図は、ある地域の1994年から2000年における未成年の年齢別図書館利用者数を示したものである。この図から確実にいえるのはどれか。 (東京消防庁 2003)

未成年の図書館利用者数



- この地域の2000年の未成年図書館利用者数は5年前と比べて増加している。
- 1994年から2000年において、未成年図書館利用者数の最も少ない年は2000年である。
- 1994年から2000年において、15歳の図書館利用者数が最も多い。
- 2001年からの未成年図書館利用者数は前年に比べて減少するであろう。
- 1994年から2000年において、未成年図書館利用者数が最大の年は220万人以上であった。

肢1は、2000年と1995年を比較するわけですが、2000年のほうが95年と比べて増加しているのは、12-13歳のみですね。それもほんの数万人です。他はすべ

で減少しており、14-15歳だけでも40万人以上の減少ですから、全体では2000年のほうが減少しているのは明らかです。

**肢2**は、1997年の数値が全体的に低いことに着目してください。2000年に比べて97年のほうが多いのは10-11歳と9歳以下ですが、いずれもその差はほんのわずかです。14-15歳あたりの差を考えると、**2000年>97年**は明らかでしょう。

**肢3**は、与えられた年齢区分でいうと、最も多いのは14-15歳であることは明らかですが、**14歳か15歳かどうかは不明**ですよね。この区分の利用者のほとんどが14歳である可能性もありますので、このようなことは判断できません。

**肢4**は、こちらも判断不可能なのはわかるでしょう。この資料から**将来の予測はできません**。

**肢5**は、図を見る限り、**最大の年は95年と推定**できるでしょう。そして、この年の多いほうから3区分の、14-15歳、16-17歳、18-19歳の合計だけでも、約115+約70+約45=約230(万人)ですから、明らかに220万人以上ですね。



レベルと目標時間の説明は、巻頭「本書の効果的活用法」を見てネ!



目標時間 3分

表は、A～E 5 県の田畑面積、県の総面積に占める田畑面積の割合および 1 人当たりの田畑面積を示したものである。この表から確実にいえるのはどれか。

(国 II 1995)

| 県名  | 田畑面積<br>(km <sup>2</sup> ) | 県の総面積に占める<br>田畑面積の割合<br>(%) | 1 人当たりの<br>田畑面積<br>(m <sup>2</sup> ) |
|-----|----------------------------|-----------------------------|--------------------------------------|
| A 県 | 2,103                      | 19.2                        | 850                                  |
| B 県 | 1,683                      | 18.4                        | 936                                  |
| C 県 | 1,444                      | 22.5                        | 746                                  |
| D 県 | 1,006                      | 15.8                        | 512                                  |
| E 県 | 750                        | 12.2                        | 477                                  |

- 1 人口の一番少ない県はC県である。
- 2 E県の人口はB県の人口の約1.5倍である。
- 3 C県とD県の総面積はほぼ等しい。
- 4 A県とB県の人口はほぼ等しい。
- 5 人口の一番多い県はD県である。


肢1と肢5は一緒に検討してしましましょう。人口は、「田畑面積」… (a) を「1人当たりの田畑面積」… (b) で割ればわかります。

肢1は、最少がC県ということですが、E県と比べてみてください。aは半分ちょっとですが、bは半分以上かなり多いですね。ということは、E県のほうが少ないでしょう。

肢5も同様で、D県と比べてA県のほうが、aは2倍以上なのに対して、bは2倍未満ですから、A県のほうが多いですね。

これに続いて、肢2と肢4も同様に検討できますね。

肢2は、肢1の結果が参考になるでしょう。E県の人口はわりと少なかったですね。B県と比べると、



小太郎の  
電卓部屋

$$\begin{aligned} \text{A 県} &: 2,103 \div 850 \approx 2.47 \\ \text{B 県} &: 1,683 \div 936 \approx 1.8 \\ \text{C 県} &: 1,444 \div 746 \approx 1.94 \\ \text{D 県} &: 1,006 \div 512 \approx 1.96 \\ \text{E 県} &: 750 \div 477 \approx 1.57 \end{aligned}$$

B県のほうが、**aは2倍以上**、**bは2倍未満**ですから、**B県の人口のほうが多い**ので、本肢は明らかに誤りです。

**肢4**は、肢5の結果が参考になるでしょう。B県に比べて、A県のほうが**aは結構大きいのにbは小さい**のですからほぼ同じとはいえませんね。

よって、残る**肢3**が正解となります。総面積は「**田畑面積**」…(a)を、「**県の総面積に占める田畑面積の割合**」…(c)で割ればいいのですが、D県に対してC県は、**a、cとも1.5倍弱**ですから、これはほぼ同じとみていいでしょう。



小太郎の  
電卓部屋

C県； $1,444 \div 22.5 \div 64.2$   
D県； $1,006 \div 15.8 \div 63.7$

目標時間 3分

表はA社に対するB社、C社の同年同月の賃金格差を示したものである。表から確実にいえるのはどれか。(国税 1997)

A社に対するB社・C社の年齢階層別賃金格差  
(A社を100.0とした場合)

| 年度<br>年齢層 | B 社         |             |             | C 社         |             |             |
|-----------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|           | 1970年<br>6月 | 1992年<br>6月 | 1993年<br>6月 | 1970年<br>6月 | 1992年<br>6月 | 1993年<br>6月 |
| 20～24歳    | 100.7       | 96.8        | 97.9        | 104.9       | 101.2       | 101.7       |
| 25～29歳    | 101.7       | 95.3        | 95.5        | 103.8       | 98.3        | 99.0        |
| 30～34歳    | 98.9        | 90.3        | 91.3        | 96.3        | 89.7        | 90.9        |
| 35～39歳    | 95.0        | 87.9        | 87.8        | 88.5        | 83.6        | 82.3        |
| 40～44歳    | 88.7        | 85.6        | 85.0        | 78.5        | 77.1        | 76.8        |
| 45～49歳    | 88.7        | 83.7        | 84.0        | 78.5        | 72.1        | 72.6        |
| 50～54歳    | 79.0        | 81.6        | 82.1        | 68.2        | 69.1        | 68.2        |
| 55～59歳    | 79.0        | 83.0        | 83.2        | 68.2        | 71.4        | 71.8        |

- 1 C社の20～24歳の賃金とC社の55～59歳のそれとの賃金差は、1970年6月より1993年6月のほうが小さい。
- 2 1993年6月における、B社の賃金とC社のそれとを8つの年齢層ごとに比べると、C社の賃金は2つの年齢層でB社の賃金より高い。
- 3 1992年6月のB社の賃金と1993年6月のB社のそれとを、8つの年齢層ごとに比べると、1993年6月の賃金は1992年6月のそれより6つの年齢層で高い。
- 4 1992年6月には、C社の賃金は年齢層が上になるほど高い。
- 5 1993年6月における、A社の55～59歳の賃金はA社の20～24歳のそれの約1.4倍である。

与えられたデータは、A社に対するB、C社の賃金格差をA社を100とした指数で表したもののみですから、A社の賃金に対して同年同月の同年齢層のB社やC社の賃金しか比較できません。

したがって、肢1でできかれています。20～24歳と55～59歳の金額差や、70年6月と93年6月の比較は判断不可能です。

また、肢3の92年6月と93年6月との比較、肢4の年齢層間での比較、肢5のA社の20～24歳と55～59歳の比較も一切判断不可能となります。

よって、残る肢2が正解です。肢2のみA～C社間での比較をきかれていますね。93年6月のA社の賃金を100とした指数で、同年同月のB社とC社の指数を比べると、20～24歳と25～29歳の2つの年齢層でB社<C社となっており、本肢が正しいですね。



### One Point

ワンポイント

何がわかる資料なのかを把握していれば本問は超カンタン！ 判断不可能な選択肢にはくれぐれもご注意ください！

アドバイス

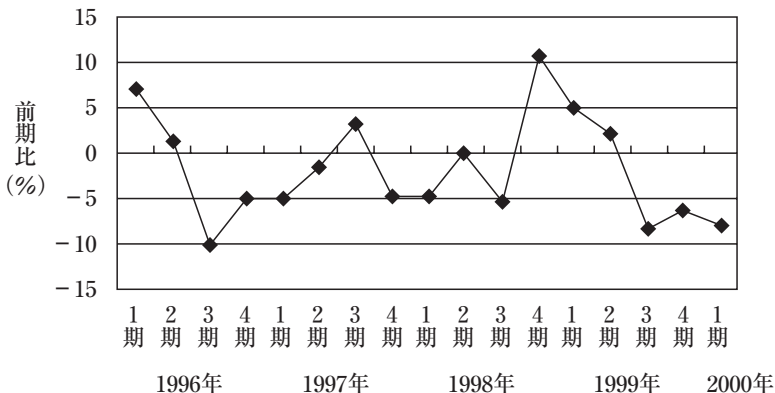
### Advice



目標時間 3分

図は、わが国の公的固定資本形成（実質）の推移を四半期ごとに示したものである。これから確実にいえるのはどれか。（東京消防庁 2002）

公的固定資本形成（実質）



- 1 公的固定資本形成（実質）の大きさが前期を下回ったのは1996年第2期をはじめ8回である。
- 2 公的固定資本形成（実質）の大きさが前期を上回ったのは1996年第4期をはじめ8回である。
- 3 公的固定資本形成（実質）の大きさが最小だったのは1996年第3期である。
- 4 公的固定資本形成（実質）の大きさが最大だったのは1998年第4期である。
- 5 1999年第3期の公的固定資本形成（実質）と2000年第1期のそれとを比較すると、前者のほうが大きい。

与えられた図は**前期比**ですから、**肢1**の「前期を下回った」は図の**数値がマイナス**であるところを、**肢2**の「前期を上回った」は図の**数値がプラス**であるところを意味します。

しかし、96年第2期を見ますと、前期比は**プラス**ですし、96年第4期は**マイナス**ですから、肢1, 2はともに誤りですね。

つぎに**肢3**と**肢4**ですが、96年第4期の前期比はマイナスです。**第3期より減少**していますので、第3期が最小ではありません。また同様に99年第1期のそれはプラスですから、**98年第4期より増加**しており、99年第4期が最大ではありませんね。

残る**肢5**が正解になります。99年第3期と比べて、99年第4期、2000年第1期と**2期連続で前期比はマイナス**ですから、後者に比べて前者が大きいのは明らかですね。



### ちょっと補足

前期比がマイナスを指しているのは10回、プラスは6回で、後半部分も誤りだね！

これを「実数のグラフ」と勘違いしたときの引っかけなので注意してね。





目標時間 4分

表はA市における騒音の発生源別の苦情件数の割合（単位：％）の推移を表したものであるが、これからいえることとして妥当なのはどれか。（国Ⅱ 1994）

|                | 工事等  | 建設作業 | 交通・運輸 | 深夜営業 | その他の営業 | 家庭生活 | その他 |
|----------------|------|------|-------|------|--------|------|-----|
| 昭和63年<br>(140) | 34.0 | 28.1 | 14.3  | 8.2  | 5.6    | 3.7  | 6.1 |
| 平成元年<br>(125)  | 35.6 | 22.3 | 12.7  | 12.6 | 7.2    | 3.5  | 6.1 |
| 平成2年<br>(98)   | 36.0 | 17.6 | 10.5  | 18.4 | 8.1    | 3.6  | 5.8 |
| 平成3年<br>(100)  | 38.1 | 14.0 | 7.1   | 23.0 | 9.2    | 2.7  | 5.9 |

（注）各年の（ ）内の数字は平成3年の総件数を100とした場合の数字である。

- 1 昭和63年から平成3年までの間において、「工事等」の苦情件数は一貫して増加している。
- 2 「建設作業」の苦情件数についてみると、平成3年は昭和63年の約35%に減少している。
- 3 「交通・運輸」の苦情件数が最も少ないのは、平成2年である。
- 4 「深夜営業」の苦情件数についてみると、平成3年は昭和63年の約3倍になっている。
- 5 平成3年の苦情件数についてみると、対前年増加率が最も大きいのは、「その他の営業」である。

肢1は、確かに「工事等」の構成比は増加していますが、各年度の（ ）内の指数を見ると、総件数は下がっていますね。そうすると、たとえば平成2年に着目してみましょう。構成比はちょっと増えていますが、総件数はかなり下がっていますので、ここは増加しているとはいえないでしょう。

肢2は、平成3年を100とした指数を基準にして表

すと、平成3年の「建設作業」は14.0ですね。本肢が正しければ、 $35\% = 3$ 分の1強ですから、昭和63年のそれは、14.0の3倍弱のはずですが、その数値をみると、 $14.0 \times 0.281 = 14.0 \times 2.81$ ですから、本肢は正しいようですね。もっとも、簡単な計算で済みますから、計算で確認しても大したことはないでしょう。

**肢3**は、こちらも平成3年を100とした指数を基準に考えますと、平成2年は98の10.5% (= 1割以上)ですから9.8以上はあるのに対し、平成3年のそれは7.1ですから、こちらのほうが少ないでしょう。

**肢4**は、同様に平成3年の総件数を100とすると、「深夜営業」は23.0です。一方63年は、 $14.0 \times 0.082$ ですから、10以上ありますね。3倍とはいえないでしょう。

**肢5**は、ここはテクニック④を使って、構成比の増加率で判断しましょう。

「その他の営業」は8.1%→9.2%でその差1.1ですから2割までは増加していないのに対して、「深夜営業」のそれは、18.4%→23.0%でその差4.6ですから、ここは2割以上増加しています。実数の増加率もこちらのほうが大きいと判断できますね。



## One Point

ワンポイント

もし、正しければこれくらいになるかな…ってところから考えることも、資料解釈には大事なテクニックだよ！

アドバイス

## Advice

## 小太郎の電卓部屋

63年の建設作業は、  
 $14.0 \times 0.281 \div 39.3$   
 平成3年のこれに対する割合は、  
 $14.0 \div 39.3 \div 0.356$ で、約35.6%です！

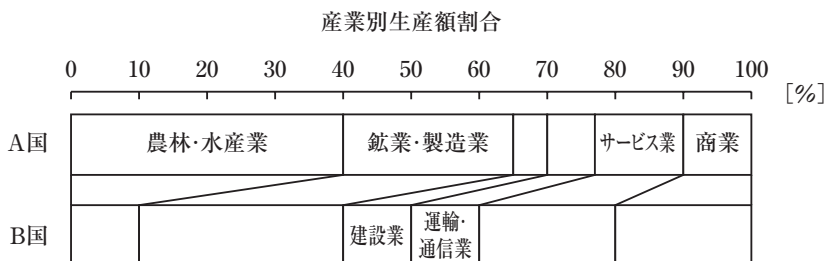
巻末付録2 テクニック集参照！

## 1

## Basic 6

目標時間 3分

次の図はA国とB国の産業別生産額割合を示したものであり、農林・水産業の生産額はA・B両国で同じである。この図から判断して、確実にいえるのは次のうちどれか。  
(千葉県警 2002)



- 1 商業の生産額は、B国はA国のおよそ12倍である。
- 2 A国の鉱業・製造業の生産額はB国の建設業の生産額の2分の1である。
- 3 B国の総生産額がその割合を変えずに50%減少したとしても、B国の建設業の生産額のほうが、A国のサービス業の生産額よりも多い。
- 4 A国の総生産額がその割合を変えずに100%増加したとすると、A・B両国の商業の生産額はほぼ等しくなる。
- 5 A・B両国の総生産額を合計し、産業別割合を見ると、建設業の生産額の割合は20%となる。

A・B両国の農林・水産業の生産額が同じということは、A国の総額の40%と、B国の総額の10%が等しいということですよね。

では、**仮にA国の総額を100**とすると、農林・水産業の生産額は40ですから、B国の10% = 40となり、**B国の総額は400**と表せます。

では、この数値で各肢を検討してみましょう。

**肢1**ですが、商業の生産額は、A国は**構成比をそのまま**読めばいいので10、B国のほうは、**構成比を4倍**して読めばいいですね。 $20 \times 4 = 80$ ですから8倍です。

肢2は、A国の鉱業・製造業は25、B国の建設業は $10 \times 4 = 40$ ですから2分の1にはなりません。

肢3は、B国の総額を400→200にすればいいので、構成比を2倍して読みましょう。B国の建設業は $10 \times 2 = 20$ 、A国のサービス業は15に満たないですから、本肢は正しいですね。

肢4ですが、今度はA国の総額を100→200に考えましょう。しかし、それでも総額はB国のほうが大きいですね。さらに商業の構成比も $A < B$ ですから、明らかにB国のほうが大きくなり、ほぼ等しくなる可能性はないでしょう。

肢5は、建設業の構成比を見てください。A国5%、B国10%です。ここでこの両国の合計で、建設業の構成比が20%にもなるはずはないでしょう。

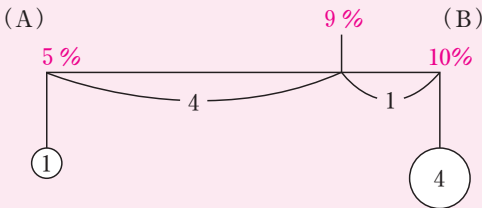
ちなみに、てんびん図（テクニック⑧）を使って、両国を合計したところの、建設業の割合は9%とわかりますね。

### ちょっと補足

Bを半分にしても同じなので、肢3同様にBの構成比を2倍にするだけでも比較は可能だね。

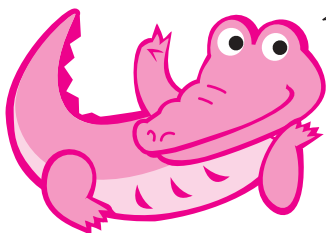


巻末付録2テクニック集参照！



# 付録

- 基本用語集
- テクニック集
- 暗算問題集



ここでテクニック  
を確認して、暗算  
力を磨こう！



# 基本用語集



## 1 構成比

たとえば、全体を100としたときに、その全体を構成している各項目がそれぞれいくらかを占めているかを表す数値。

$$\text{当該項目の構成比} = \frac{\text{当該項目の数値}}{\text{全体の数値}}$$

$$\text{当該項目の数値} = \text{全体の数値} \times \text{当該項目の構成比}$$

## 2 指数

基準となる値を100として、それぞれの項目の値を表した数値。

$$\text{指数} = 100 \times \frac{\text{当該項目の数値}}{\text{基準となる数値}}$$

## 3 増加率、増減率、伸び率

たとえば前年度に対して増加した割合を、対前年度増加率という。

$$\text{対前年度増加率 (\%)} = \frac{\text{今年度の数値} - \text{前年度の数値}}{\text{前年度の数値}} \times 100$$

# テクニック集



## テクニック 1 かけ算の比較

「 $A \times a$ 」…①と「 $B \times b$ 」…②の大きさを比較するときのテクニックです。

$A > B$  かつ  $a > b$  なら、文句なく①  $>$  ②でしょう。問題は、 **$A > B$  かつ  $a < b$  のとき** ですよ。

①、②のそれぞれがわりとたやすい計算で大小が判断できるようなら、それで問題ないでしょう。しかし、それが結構大変なときはどうするかということで、次の例を見てください。

例 1) ①  $38785 \times 4453$  vs ②  $19536 \times 9028$

①と②はどちらが大きいか見分けられましたか？ 前者どうしを比較すると、19536 に対して38785は約2倍ですが、**2倍にちょっと足りない**ですね。それに対して後者どうしは、4453に対して9028は**2倍以上**明らかにあります。かけ算は、片方が2倍でもう片方が2分の1であれば、その値は同じになりますから、例1は①  $<$  ②ですね。では次の例はどうでしょう。

例 2) ①  $7962 \times 0.349$  vs ②  $10219 \times 0.261$

前者は②のほうが大きいのですが、その差 $10219 - 7962$ は、およそ2200~2300ですから、7962に対して2割以上3割以下というところでしょう。つまり、①に対して②のほうが**1.2~1.3倍**ですね。それに対して後者は①と②の差が0.08~0.09程度でこちらは0.261の3割以上あります。つまり、②に対して①のほうが**1.3倍以上**あります。よって、①  $>$  ②ですね。

このように、適当な組合せ（たいていは前者どうし、後者どうし）で、それぞれ大きいほうが小さいほうのおよそ何倍にあたるかを**暗算で検討**することで大小の判断はほとんど可能です。

では、もう1問。①が②の**3倍以上かどうか**を判断してみてください。

# 暗算問題集



## Exercise 1

次の  に整数値で答えなさい。

① 96は16の  倍

② 171は19の  倍

③ 143は13の  倍

④ 645は43の  倍

⑤ 729は27の  倍

⑥ 198は28の約  倍

⑦ 430は48の約  倍

⑧ 2761は230の約  倍

⑨ 7955は465の約  倍

⑩ 1550は705の約  倍

⑪ 7388は1219の約  倍

⑫ 40500は989の約  倍

⑬ 71200は2150の約  倍

⑭ 33333は1391の約  倍

⑮ 233000は3698の約  倍

⑯ 185911は6411の約  倍

⑰ 87963は8016の約  倍

⑱ 372000は7441の約  倍

⑲ 143109は5097の約  倍

⑳ 184000は9123の約  倍



## 暗算問題集

## 解答



## Exercise 1

- ① 6    ② 9    ③ 11    ④ 15    ⑤ 27    ⑥ 7  
 ⑦ 9    ⑧ 12    ⑨ 17    ⑩ 2    ⑪ 6    ⑫ 41  
 ⑬ 33    ⑭ 24    ⑮ 63    ⑯ 29    ⑰ 11    ⑱ 50  
 ⑲ 28    ⑳ 20

## Exercise 2

- ① 1.2    ② 2.5    ③ 4.8    ④ 10.5    ⑤ 1.5    ⑥ 3.1  
 ⑦ 4.9    ⑧ 6.5    ⑨ 5.5    ⑩ 4.2    ⑪ 9.3    ⑫ 1.9  
 ⑬ 2.2    ⑭ 3.4    ⑮ 7.4    ⑯ 0.9    ⑰ 0.8    ⑱ 0.4  
 ⑲ 0.6    ⑳ 0.5

## Exercise 3

- ① >    ② <    ③ <    ④ <    ⑤ <    ⑥ >  
 ⑦ <    ⑧ >    ⑨ <    ⑩ <    ⑪ <    ⑫ <  
 ⑬ <    ⑭ <

## <執筆>

畑中敦子（はたなか・あつこ）

大手受験予備校を経て、1994年度より14年間、LEC東京リーガルマインド専任講師として「主要5科目完全マスター講座」等、主に地方上級・国家一般職（旧国家Ⅱ種）レベルの数的処理の講座を担当。

独自の解法講義で人気を博した。

公務員試験／畑中敦子シリーズ

## 畑中敦子の資料解釈の最前線！

---

2004年4月30日 第1版 第1刷発行

2011年11月25日 第12刷発行

執筆●畑中 敦子

編著者●株式会社 東京リーガルマインド  
LEC総合研究所 公務員試験部

---

発行所●株式会社 東京リーガルマインド

〒164-0001 東京都中野区中野4-11-10

アーバンネット中野ビル

☎03(5913)5011 (代表)

☎03(5913)6336 (出版部)

☎048(999)7581 (書店様用受注センター)

振替 00160-8-86652

[www.lec-jp.com/](http://www.lec-jp.com/)

---

本文フォーマットデザイン&カバーイラスト●デザインスタジオ ケイム

カバーデザイン●エー・シーブランニング 千代田 朗

印刷・製本●日経印刷株式会社

---

©2004 TOKYO LEGAL MIND K.K., Printed in Japan

ISBN978-4-8449-0199-0

複製・頒布を禁じます。

本書の全部または一部を無断で複製・転載等することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版者の権利侵害になりますので、その場合はあらかじめ弊社あてに許諾をお求めください。

なお、本書は個人の方々の学習目的で使用していただくために販売するものです。弊社と競合する営利目的での使用等は固くお断りいたしております。

落丁・乱丁本は、送料弊社負担にてお取替えいたします。出版部までご連絡ください。

ISBN978-4-8449-0199-0

C3330 ¥1200E



9784844901990



1923330012002

定価1,260円 本体 1,200円 +税 5%  
KD00199



**畑中敦子の資料解釈の最前線!**